心友は人生の宝だよ

その３、ささやかなクラス会

３月３１日、千葉県我孫子市在住の川又章君から手紙が届いた。今回東京行きを決意したのは、この手紙の力である。少し長くなるが、最初の部分を引用したい。

拝啓、当地も桜の季節となりました。5分咲きの桜が雨に濡れています。

さて、この間のお便りで、もう四国を出ることはないだろうとのことでしたが、クラス会をやるとなったら如何でしょうか。こちらで集まれるのは、岩田君、伊藤君、それに私の３人位かと思います。上京することは叶いませんか。私は体が動くうちにもう一度貴兄にお会いしたいと考えています。貴兄の上京が叶わない場合には、私が香川へ出向いて行っても良いと考えています。―以下省略―

４月２２日、浜松で空手部の１年後輩の山口昌行君に会い、その夜掛川の榛葉君の家へ泊めてもらって、翌２３日午前中に焼津の川村君の家へ連れて行ってもらう。会って３人で昼食を共にして後、四国・香川へ帰って来る。そんな計画を山口君と榛葉君と約束していた所へ、川又君の手紙が届いたのだ。私が東京へ出て行けば３人に会えるじゃないか。東京まで足を伸ばそう。国分寺の娘に、かくかくしかじかの次第で東京へ行く。２３日（木）と２４日（金）の２晩泊めてくれ、とお願いした。

４月２４日（金）に、筑波大学の前身・東京教育大学があった茗荷谷（みょうがだに）の茗渓（めいけい）会館（大学の同窓会館）でお願いしたいと、４月３日（金）にハガキ（速達）で川又君へお願いした。その返事のハガキが４月１４日（火）に届いた。（消印は４月８日、６日間もかかっている）

４月２４日（金）１０時半に茗荷谷駅へ着いた。開会の１１時までに未だ３０分ある。気が付けば、山手線大塚駅へ向かって歩いていた。１・２年の時、大塚駅から大学まで歩いて通学した懐かしい道である。大抵の人は池袋

から茗荷谷まで地下鉄で通学していたが、私は地下鉄の定期代を倹約して私は１人で歩いて登校した。１５分程歩いて引き返した。１１時直前に茗渓会館へ入った。私が最後だった。川又君と岩田君は並んで座っている。川又君の前に伊東君が座っている。私は、伊東君の右隣・岩田君に向かい合って座った。川又君と岩田君はビール、伊東君は焼酎、下戸の私はコカコーラで、久し振りの再会を祝って乾杯した。

　私が耳が遠いのを心配して、川又君は沢山のＢ５の用紙を準備してくれていた。その用紙を使って横の伊東君が要点をさっとメモしてくれて、私はそれを見て大いに助かった。会話がほぼ理解出来たのは川又君と伊東君の心尽くしのお陰。取り分け伊東君には手間を取らせてしまったなあ。改めてこの場を借りてお礼を申し述べたい。伊東君は緑内障で右目は失明している、と言われる。岩田君は数年前に脳梗塞を患っているし、川又君は両膝を手術しているとか。見せてくれたが、切開跡の大きいのに驚いた。

　２年生の空手の寒稽古の合宿が１月１５日に終わって１６日に登校したら、全員研究室が決まっているではないか。岩田君と２人路頭に迷った訳だ。香川邦雄先生が受け入れてくれた。「祖師谷農場の千葉弘見先生へお願いに行って来なさい」と指示を受け、岩田君と２人で行ったよ。香川先生様々だよ。ある日、「祖師谷農場へ行って草刈りをして来なさい」と指示を受け、２人で行った話をしたら、川又君が、「小野が７割刈ったんやろ」とのたまう。私は「９５％だよ」と訂正した。今のような鋸（のこ）鎌はまだ無くて砥石（といし）で研ぐ薄鎌だよ。ワシは小学校の時から草刈しとるけど、岩田君は大変だったわのう。岩田君は黙って聞いていた。

　川又君の顔を見ていると、つい遠藤織太郎先生と重なってくる。私が「遠藤先生にお会いしたい」と手紙を出したら、「会える段取りをするよ」と返事をくれた。令和２年の１月か、２月に直ぐに上京すればよかったのに、「１０月上旬に頼むわ」とお願いしたばっかりに・・・」と話した。岩田君が遠藤先生の最後の著書「土に生き農に学ぶ」の話をしてくれた。私の胸中を察した川又君が、５０ページ足らずの本だから、帰ったらコピーして送るよ」と

言ってくれた。

耳の遠い私が一番よく喋ったかもしれない。遠くの四国から出て来たのだから許してもらおう。予約の３時間がきた。正に「あっ」という間だった。勘定を済ませて外へ出た。岩田君の息子さんがそこに居た。何回もお会いしているので直ぐに分かった。「神戸から帰る時、小野さんの家へ寄せてもらいました」と挨拶してくれる。数年前に脳梗塞を患っている岩田君に神奈川県の座間市から息子さんが付き添いで来てくれたんだと知って、会えた嬉しさに有難さが倍加して込み上げてきた。

皆さん一緒に、地下鉄茗荷谷駅へ向かった。駅で息子さんが、４人の記念写真を撮ってくれた。

４月３０日（木）、岩田君が、茗荷谷駅で息子さんが撮ってくれた写真を送ってくる。５月１日（金）、川又君から、遠藤先生の「土に生き農に学ぶ」のコピーが届く。岩田君も川又君も、しようと思ったこと、しなければならないことは即実行する。自分も２人のようにならなければと、大学の研究室での日々を、つい昨日のことのように思い出す。

最後に、この場を借りて、遠藤織太郎先生のことを少し書いておきたい。

川又君は、遠藤先生と同じ千葉県我孫子市に住んでいて、時々お会いしていた。その話を聞く度に、私は先生にお会いしたい思いが段々と高（こう）じてきた。その旨、先生に手紙を差し上げたら、「一度お会いしましょう」の御返事の手紙を頂いたのだ。それで川又君が計画して、川又君と岩田君と私の３人でお会いしようということになった。令和２年２月のことである。１０月にお会いすることにしたいと川又君に頼んだら、３月にコロナが蔓延し始めた。やむなく延期した。遠藤先生は令和３年秋にあの世へ旅立たれてしまった。

私は先生とは面と向かって一度も話をしたことがない。それなのに、大学卒業以来ずうっと一度お会いしたいものだと思い続けてきた。自分でも不思議である。

私は笠田高校の農業科の教師になろうと、東京教育大学農学部へ進学した。大学の農学部には農場実習がある。色々な農作業を実地に学習するのである。

１・２年の時の２年間、毎週火曜日の午後、祖師谷農場へ実習に行った。遠藤先生は、３月に母校を卒業したばかりの実習担当の先生だった。指導して頂いた４人の先生の中の１人だった。遠藤先生の指導の下の農場実習は楽しかった。終わって先生の講話を聞くのがとても楽しみだった。３年生になって祖師谷農場へ行っても、先生にはお会い出来なかった。㈶電力中央研究所・農電研究所へ移られていたからだった。

先生のプロフィールを簡単に記す。昭和８（１９３３）年東京田無町の農家に生まれる。昭和２７（１９５２）年東京都立立川高校定時制卒。昭和３３（１９５８）年東京教育大学農学部卒。同農学部教務員。昭和３５（１９６０）年㈶電力中央研究所・農電研究所主任研究員。昭和５５（１９８０）年新潟大学農学部大学院教授。平成２（１９９０）年筑波大学農学研究科大学院教授。平成９（１９９７）年筑波大学退官。

５月１日（金）、川又君から、遠藤先生の「土に生き農に学ぶ」が届いた。その夜、一気に読み終えた。

男ばかり兄弟４人の４番目。上の２人は陸軍と海軍のパイロット、直ぐ上の兄は徴用工で引っぱられて家に居らず。小学校２年から一人前の働き手として農業を手伝った。高校は定時制、昼間働いて夜学ぶ生活。一浪して東京教育大学農学部へ進学。農学部では「農業のもっとも身近にある、作物学を専攻し勉強してまいりました」（１９ページ）とある。先生の大学進学までの生い立ちにつまされ、自分が先生にお会いしたかった原点はこの辺りにあったのかも知れないと思ったのだった。

４１ページのあとがきの中に「日本はこのまま進めば、「瑞穂の国でなくなってしまう危惧さえあります」、最後に読んだこの一文、私の脳裏の奥に沁み込んできた。

この著書は先生８６歳のものである。それを８６歳の私がこの５月１日に読んだのだ。川又君、ありがとう。（５月１日記）

（令和８年６月１日）